

# 日露関係の 知的インフラを構築する

## ■第5回日露フォーラムを終えて

ふくしまあきこ  
福島安紀子  
ジャパン・フアウンデーション  
特別研究員



ふくしま あきこ ●1994年米国ジョージア・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院より修士号（国際関係論、国際経済学）。97年大阪大学より博士号（国際公共政策）。94年総合研究開発機構国際研究交流部研究員、主任研究員を経て、01年7月主席研究員。06年9月より現職。06年4月より慶應義塾大学法科大学院非常勤講師。そのほか、防衛施設中央審議会委員等を兼務。著書に *Japanese Foreign Policy: A Logic of Multilateralism* ほか多数

### 日露両国の有識者、 約50名が参加

2007年3月19、20日の両日、東京において「第5回日露フォーラム」が開催された。日本側のジャパン・フアウンデーションとロシア側の戦略策定センターの共催によるものである。

この日露フォーラムは、2000年9月のプーチン大統領訪日の際に、当時の森喜朗総理大臣との間で設置が合意されたもの。その後の両国外務大臣間の決定に従い、友好的な日露関係及び早期の平和条約締結の重要性に関する日露両国民の理解を深め、世論を啓発することを目的

として設立された。

別表に示すように、これまでモスクワ、サンクトペテルブルク、イルクーツク及び石川県金沢市において、4回のフォーラムが開催されてきた。03年1月に当時の小泉純一郎総理が訪露したときに合意された「日露行動計画」においても、両国の知的交流の場としての日露フォーラムの重要性が指摘されている。

さて、今回の第5回フォーラムには、日露両国の各界の有識者が約50名参加した。麻生太郎外務大臣、森喜朗元総理らが臨席し、有馬龍夫日本国政府代表及びドミトリー・メーゼンツェフ・ロシア連邦院副議長

兼戦略策定センター副理事長が共同議長を務めた。

ロシアのセルゲイ・ラブロフ外務大臣からもメッセージが寄せられた。麻生外務大臣は、開会挨拶において、日露関係には安全保障からエネルギーまで「互恵的利益をもたらす分野」が数多くあるが、「最終的に解決できていないのが領土問題」であり、「日露関係の潜在力を飛躍的に発揮するためには、領土問題の解決が必須」であると述べた。

そして、昨年11月のハノイのAP E C首脳会議の際の日露首脳会談で「領土問題に関し、これまで達成された諸合意・諸文書に基づき双方に受け入れ可能な解決策を見出すために精力的に交渉していくことで意見が一致している」ことが紹介された。

### 両国の相互理解を 幅広く進めるために

第5回日露フォーラムは、第1回フォーラムから継続している「グローバル化の中でのアジア太平洋地域における日露関係の展望」という全体テーマのもと、第1セッションでは、「アジア太平洋の中の日露協力の展望…政治と文化」を取り上げ、

政治面における日露関係の進展、アジア太平洋地域における日露の役割等について議論した。フォーラムは北方領土交渉の場ではないが、歴史的な視座から領土問題も議論された。また、アジア太平洋地域的情勢が大きく変わる中で、日露の誤解から来る相互不信を除き、アジア太平洋の平和と安定のために、北東アジア版のヘルシンキ宣言などの可能性も提起された。

文化面については、歴史的に日本人はロシア文化、特に文学、音楽、舞踊等に関心を寄せてきた一方、ロシアでは最近、日本映画、現代文学、食文化、漫画・アニメに対する関心が高まっている。このような日露相互の文化的関心は、両国関係のひとつの大きな資産であり、これの活用が大切であることが指摘された。

しかしながら、日露の相互理解はまだ不十分であり、これが両国間の不信と、ときには緊張を招いていることが問題提起された。今後は両国の相互理解を幅広く進める必要があり、マスコミ、市民団体なども含めた幅広い交流を推進し、両国の世論、さらには国民の考え、感情に

●「日露フォーラム」の歩み

第1回	開催日	2001年5月29日(火)、30日(水)
	場所	モスクワ
	共同議長	総合研究開発機構(NIRA)、ロシアの戦略策定センターの共催 日本側●有馬龍夫政府代表 ロシア側●グレフ経済発展貿易大臣
	議論の主なテーマ	①経済の展望、②人文・文化交流、③地政学的関係(平和条約締結問題に関連する議論を含む)
参加者	日露双方の有識者約70名	
第2回	開催日	2002年5月20日(月)、21日(火)
	場所	サンクトペテルブルク
	共同議長	総合研究開発機構、戦略策定センター及び北西戦略策定センターの共催 日本側●有馬龍夫政府代表 ロシア側●A・P・ロシユコフ外務次官
	議論の主なテーマ	①21世紀の平和・安全保障の新しいパラダイム、②国境を越えたテロリズムの根源的要因とその除去への日露協力、③日露文化交流の展望
参加者	日露双方の有識者約50名	
第3回	開催日	2003年9月12日(金)、13日(土)
	場所	イルクーツク
	共同議長	総合研究開発機構、戦略策定センター及びイルクーツク州州政府の共催 日本側●有馬龍夫政府代表 ロシア側●A・P・ロシユコフ外務次官
	議論の主なテーマ	①経済投資分野における日露協力、②アジア太平洋地域諸国における協力関係の強化の要因としてのエネルギー及び環境分野における日露のパートナーシップ、③日露両国の相互理解・対話の深化をめざして
参加者	日露双方の有識者約50名	
第4回	開催日	2004年10月20日(水)、21日(木)
	場所	石川県金沢市
	共同議長	総合研究開発機構、戦略策定センターの共催 日本側●有馬龍夫政府代表 ロシア側●D・F・メーゼンツェフ連邦院副議長兼戦略策定センター副理事長
	議論の主なテーマ	①北東アジアの平和と安定に資する日露関係—歴史的視座に立って、②シベリア・極東と日本の交流—イルクーツクから石川へ
参加者	日露双方の有識者約40名	
第5回	開催日	2007年3月19日(月)、20日(火)
	場所	東京都
	共同議長	ジャパンファウンデーション、戦略策定センターの共催 日本側●有馬龍夫政府代表 ロシア側●D・F・メーゼンツェフ連邦院副議長兼戦略策定センター副理事長
	議論の主なテーマ	①アジア太平洋の中の日露協力の展望：政治と文化、②資源と関連テクノロジー
参加者	日露双方の有識者約50名	

訴えることが重要との点について意見の一致を見、ジャパンファウンデーションがモスクワに事務所を開設

することがこのような交流の窓になり、意味が深いと歓迎された。今後、日露両国が価値観や考え方をどこまで共有できるかが要となる。

**資源と関連テクノロジーでの  
いっそうの協力へ**

第2セッションでは経済について「資源と関連テクノロジー」をテーマとして議論した。日露経済関係全般は発展してきているが、今後エネルギーや観光などについて、さらに可能性があることが指摘された。一方、日本企業がトラブルに巻き込まれることも多く、これがさらなる経済関係の発展を損ねていることも問

題提起され、透明な法制度の一層の整備を望む意見が出された。エネルギーについては、東シベリア開発、その中でも日露協力のシナリオの推進、ロシアの省エネ・ポテンシャルと日本のエネルギー関連技術の協力の可能性などを話し合った。その関連で政府間では、油濁防止の演習や、テロ・海賊対策、CO<sub>2</sub>を吸収するシベリア森林保護の作業部会が立ち上げられていることも紹介された。

議論を通じて、日本側参加者は領土問題が解決され、平和条約が早期に締結されることが日露関係を飛躍的に発展させることにつながると指摘した。一方、ロシア側参加者は日

本が北方領土問題に固執するため、両国関係の発展を損なっている」と論駁した。

日露フォーラム終了後、日本記者クラブにおいて両国共同議長、共催団体長、主要参加者等が記者会見を開催し、第5回日露フォーラム概要を紹介した。その後、ロシア側参加者は、文化行事に参加し、大蔵流狂言の鑑賞、築地市場、六本木ヒルズ森アーツセンター、森美術館を見学し、日本文化の伝統と現代の両面に触れた。

**二国間関係をつむぐ  
発信と受信の場**

日露フォーラムは、民間の有識者が参加し、政府関係者も個人の立場で参加する、いわゆる「トラック・ツー」

の知的対話として設立されている。回数を重ね、胸襟を開いた率直かつ建設的な議論が展開されるようになり、お互いの不信感の所在も明らかになっている。日露フォーラムは、いわば、日露関係の知的インフラ構築の役割を果たしてきているといえよう。

このような議論を通じて、日露双方のその時点での体温を測ることが出来、諸課題が顕在化する前に早めに論調を知ることが出来る。また、日露の相違点を明らかにすることに、これからの二国間関係をめぐり、これからの重要な発信と受信の場になっている。さらにグローバル化が進展する中で日露の抱える共通の課題、例えば文化の普遍性と固有性等も浮かびあがり、さらなる日露協力、相互理解の接点も生まれているといえよう。

今回の日露フォーラムについては、2008年の適切な時期に開催する方向で今後、外交ルートを通じて調整していくことが合意されたとともに、その間フォーアアップとして世論啓発につながる活動を協議し、実施を検討することも合意された。